

Mary McLeod Bethune と黒人女子教育

Mary McLeod Bethune and Her Education of Young African American Women

西 崎 緑

Midori Nishizaki

福祉社会教育講座

(平成13年9月11日受理)

My study presented in this article focuses on a part of Mary McLeod Bethune's educational philosophy. She devoted herself to the education to the young African American women under the idea of 'Cult of True Womanhood'. Her aim was to enable the young people, contributing to 'racial uplift' through improving their domestic management skills. The records show that she also encouraged them additionally to learn liberal arts and prepare to pursue professional careers for the future. She clearly held the vision of betterment for her race as well as the whole of American people. For that very reason, she availed herself as the pivotal linkage of the efforts made by both the famous and infamous African American women between the Reconstruction and the Post World War II period.

はじめに

「信仰, 勇気, 兄弟愛, 尊厳, 意欲, 責任感—これらのことが, 今日, これまでにないほど必要とされている。私たちは, 黒人が平等な待遇を完全に獲得するという一大事業をなし遂げる手段として, これらを大切に育てていかなければならない。(中略) 自由の門は, もう半分開いている。私たちは, それを全部開けなければならない。(中略) もし, 私が遺産として残すものがあれば, それは私の生活と奉仕の哲学である」¹との遺言を残して, 黒人教育家であり社会運動家であった Mary McLeod Bethune (以下ベヂューン) は, 1955年5月17日に79歳の生涯を閉じた²。

ベヂューンの生涯は, 「5人分の人生を全うした」³と言われるほど, 多くの偉業に満ちている。彼女は, 1) 当時の黒人社会で緊急に解決を要していた課題の多くを解決し, 2) ベヂューン・クックマン大学を設立し, 3) 全米黒人女性協会 (the National Council of Negro Women, 以下NCNW) を通して, 黒人女性の結束による社会的・政治的前進を図り, 4) ベヂューン・ヴォルーシア海岸を開発して, 黒人の余暇活動を進め, 5) Mary McLeod 財団によって, 黒人子孫

に精神的—文化的遺産を残した。彼女はまた, ルーズベルト政権時代に, 全米青年局 (the National Youth Administration, 以下NYA) の黒人関係課長 (Director, Office of Negro Affairs) を務め (1936-1944), 多くの黒人青年に教育と就業の機会を与えた。

疑いもなくベヂューンは, 20世紀における特筆すべき人物であり, 南部再建以後から始まった, 黒人女性による社会改良運動を, 第2次大戦後の抵抗運動に繋げる, 一つの鎖環の役割を果たした⁴。未だ人種差別が残る20世紀初頭の南部において, 他の黒人女性指導者と同様 (あるいは彼女たちと共闘しながら), ベヂューンは, 黒人女性の教育の機会, 政治的権利, 人種の尊厳, 女性の自立と解放を求めて苦闘し, 黒人女性の地位向上に努力した。

先に述べたように, ベヂューンの行った活動は多岐にわたるが, 本論では, 彼女が黒人社会の自立という課題を成し遂げるための中核的活動と考えていた「学校教育」を中心に, 彼女の教育哲学 (Head, Heart, Hands) とその実際を, 当時の黒人の社会的環境と, 他の黒人教育者の思想や活動と関連させて検討する。

1. ベヂューンの生育歴と思想的系譜

ベヂューンは、1875年7月10日、サウスキャロライナ州メイエスヴィルに、サミュエル（大工）とパツィ（家政婦）・マクレオドの15番目の子どもとして生まれた。彼女自身は、生まれながらにして自由黒人であったが、解放前に生まれた兄姉はすでに近隣の農場に売られ、解放された後も同居することはなかった⁵。ただし、マクレオド家は、「我が家（Homestead）」として事ある毎に家族が集まる場所として機能しており、一家の生活は、解放民のなかでは、比較的安定していたといわれる。一家は、自らの農場で生産した食料を、時折貧窮民に分け与える程度の余裕があり、また牧師の巡回時には、必ず立ち寄る場所として、地域の人々の尊敬を集めていた。ベヂューンは、その家庭環境から、熱心な信仰、正直な生き方、勤労精神、他者への援助、計画的支出と節約の術を学んだ。また、古老から聞いた奴隷時代の話や、近隣での出来事によって、人種間の不平等を解決する必要性を、幼いながら感じるようになった。

ベヂューンが待ち望んでいた学校教育を受ける機会は、10歳の時に実現する。トゥリニティ（三位一体）プレスビテリアン教会の解放民伝道部が、メイエスヴィルに学校を開くことになり、教師エマ・ウィルソンに導かれて、彼女は初めて「学校」を経験したのであった。ウィルソンは、終始ベヂューンのよき理解者であり、やがて自らの出身校であるスコシア神学校に彼女を導いていく。白人篤志家による奨学金によって、スコシアの師範・科学コースを1894年⁶無事に卒業したベヂューンは、シカゴのドウワイト・ムーディ家庭・海外伝道学校に進学する。ムーディでは、初めて北部の地域社会を見、白人と同じ教室で勉強するという南部では不可能な経験をしながら、アフリカ伝道に将来の希望を託した。しかし残念ながら、その夢は1895年ムーディの卒業時になわぬものとなってしまった。彼女はプレスビテリアン教会指導部から、黒人の派遣予定がないことを告げられたのであった。挫折感に襲われながらも、すぐに彼女は、「他者の魂の救済のため働く」という自らの内的決意に見合う第2の道として、学校教師に方向を転換し、故郷に帰って、ウィルソンの助手として働くこととした⁷。この小学校からムーディまでの約10年間の学校教育は、彼女に教師になるために必要な学問を得させ、信仰と奉仕の精神を核に人々を導き、黒人社

会の向上に尽くす能力と決意を身につけさせたといえる。

なお、ベヂューンは、その後、メイエスヴィル小学校の経営者と同じプレスビテリアン教会によって、ヘインズ専門学校（Haines Institute）に移され、そこで約1年間教鞭をとる。ヘインズでの1年間は、短期間ながら、その後のベヂューンの職業人、あるいは社会活動家としての人生に大きな影響を与えることになった。とりわけ、校長ルーシー・レイニーから受けた影響は、その後の彼女の教育哲学、学校経営の方法の基盤を築いた。ベヂューンがデイトーナに設立した学校は、基本的にはレイニーの学校経営を真似たものであると言ってもよいほどである⁸。

レイニーは、1886年ジョージア州オーガスタにヘインズ師範・実業学校（Haines Normal and Industrial School）を開校した。この校名に「実業」を入れたのは、理性的現実主義者であった彼女の知恵で、レイニーは、当時の北部上流婦人からの寄付なしで学校経営が成り立たないことと、また彼女らが黒人の「実業教育」のみに関心があり、学問教育を望んではいなかったことを承知していたのである。レイニーは、実際に南部黒人実業教育のリーダーのブッカー・T・ワシントン⁹と親交を持ち、タスキギで行われた「実業教育」の講習会等にも度々参加している。ただし、彼女の理想は、タスキギに代表される実業教育に留まらなかった。実業教育を進める一方で、彼女は自分の生徒たちに、ギリシア語、ラテン語をはじめとする「本当の学問」をできる限り勉強するように、機会がある度に勧めていた。彼女はデュボイスと同様、黒人教育は、より広い学問を学ぶ機会であるべきだと考えていたのである。

さらにまた、熱心なクリスチャンであったレイニーは、学校教育に、宗教教育と倫理教育を加える必要を強く感じていた。なぜなら彼女は、家庭教育と公教育の機会をほとんどもたない、南部黒人家庭の児童・生徒には、学校がその役割を果たし、人間的成長と学問的自信を身につけさせなければならないと信じていたからである¹⁰。

ベヂューンがレイニーから受け継いだ黒人女子教育の理念や学校経営のあり方は、まさにこの実学を表看板に掲げながら、同時に黒人全体、とりわけ女子の将来的発展をめざして学問を身につけさせることと、宗教教育を通じて黒人女子生徒の人間性を発展させることであった。ベヂューン・クックマン大学に今日まで伝わる「Head（学問）、Heart（信仰）、Hand（奉仕）」というモツ

トーは、スコシア神学校から受け継いだものである。しかしベヂューンの経歴を見れば、これは彼女が単純にスコシアを真似ただけではなく、レイニーの教えの「Hard Work (勤労), Self-Respect (自尊心), Faith in God (信仰)」をも含めて、アメリカ社会における黒人女性の自立と地位向上を獲得する決意をこめて使用した表現であるといえる。

もう一つここで取り上げるべきレイニーの特徴は、彼女が人種問題の解決についても、黒人女子教育、特にミッション・スクールによる教育が重要であると考えていた点である¹¹。レイニーの女性観は、基本的には19世紀の女性観を踏襲し、家庭における養育の責任者、また愛情と道徳の担い手として女性をとらえるものであった。そこから彼女が強調するのは、女子教育を十分に行うことにより、黒人家庭の文化が(白人家庭並みに)向上し、黒人全体の救済(the salvation of the race)がもたらされるという主張である。レイニーの主張は、同時期の白人女性の念頭にあった「真の女性像(Cult of True Womanhood)」を、黒人の置かれた社会環境に応用したものであり、彼女は当時の保守的な社会規範と倫理を黒人女学生に要求しつつ、それによる女性の統合をまず実現し、ひいては白人と黒人が対等な関係になる社会を達成しようとしたのである。

ベヂューンは、この先駆者の主張を踏襲して、黒人女子教育に人種問題解決の糸口を見出した¹²。彼女は、レイニーと同様、黒人女性の一義的役割は、清潔さ、美しさ、思慮深さを備えた家庭を築くことであると主張し¹³、そのために自己の能力の向上と堅い信仰によってもたらされる精神の高潔さを、全ての女子学生が身につけるべきであると説いた。

ただ皮肉なことに、黒人女性の一義的役割は、家庭生活を豊かにすることであると説いた彼女も、その家庭を第一にすることはできなかった。1898年にベヂューンは、アルバート・ベヂューンと結婚し、翌年息子アルバートを出産した。しかし、彼女の教育への情熱は収まらず、やがてプレスビテリアン教会の指名により、フロリダ州パラトカに教師として赴任する。パラトカ時代、それに次ぐデイトーナ時代を通じて、ベヂューンが夫から大きな影響を受けたと記述する文献はない。パラトカでの5年間、ベヂューンは、成人教育を開始し、刑務所の受刑者や製材所の若い労働者を訪問して、キリスト教伝道と教育を行った¹⁴。これらの開拓的事業は、彼女がほぼ単独で

組織し、実行したものであり、彼女は、自分自身の活動経験を通じて、成長していったのである。なお、夫、アルバートは、1907年に単身でサウスキャロライナ州チャールストンに移り、それ以後、2人は生活を共にすることがなかった¹⁵。

ベヂューンが夢にまで見た自分自身の学校は、1904年10月4日に、黒人女子教育のためのデイトーナ文芸・産業学校(the Daytona Literary and Industrial School for Training Negro Girls 以下DLIS)として開校し、生徒5名を受け入れた¹⁶。ベヂューンが、パラトカではなくデイトーナを選んだのは、2つの理由がある。1つ目は、19世紀末から建設が始まったフロリダ東海岸鉄道(the Florida East Coast Railway)が南下しつつあり、鉄道建設に従事する黒人労働者やその家族に対する伝道と生活援助の必要を強く感じていたことである。2つ目は、デイトーナが北部上流階級の冬季保養所として発展しつつあったため、彼らからの資金援助が得やすいと考えたからである¹⁷。

実際、デイトーナでは、1900年の総人口1,690人のうち45パーセントが黒人で、もはや3つの黒人地区(ウエイクロス、ミッドウェイ、ニュータウン)が形成されていた。このうちウエイクロスとミッドウェイには、ベヂューンが到着する以前から、デイトーナの白人女性社交クラブ「パルメット・クラブ」が保育所を開いていたが、学校は未だ開設されていなかった。これらの白人女性の多くは、デイトーナの冬季住民であり、彼女らの本拠地はオハイオ、ニューヨーク、ミシガン、マサチューセッツなどの奴隷制度廃止を呼びかけた州であったため、黒人児童の教育にとりわけ深い関心を持っていた¹⁸。ベヂューンは、さっそく彼女らを学校の評議員会(the Advisory Board)のメンバーとして勧誘し、学校運営や資金集めへの参加を得た。この評議員会の設立は、彼女に、「女性の組織化」による事業展開の重要性を意識させ、その後の政治活動にも生かされることになる。なお、評議員会は、長く「ベヂューンの学校」の運営に重要な役割を果たしていった。

初期のベヂューンの学校を支えたのは、黒人地域社会の住民とデイトーナの冬季住民であった。前者は、最初に下宿を提供してくれたスージー・ワレン、学校となる2階建の家を貸してくれたジョン・ウィリアムズを始めとする、地域の黒人で、その他の者も食料を提供したり、労力を提供してくれた。後者は、評議員会で活躍するドーラ・マレーやシンシア・ランスローを始めとし

て、コンサートやバザーを開催して資金集めに貢献したパルメット・クラブの白人女性たちと、学校の運営資金提供者で、学園理事となったジェームズ・ギャンプル（プロクター・ギャンプル社長）、トーマス・ホワイト（ミシン会社社長）、ハリソン・ガーフィールド・ローデス（旅行ガイド作家）等の白人篤志家であった¹⁹。

ベヂューンは、これらの地域社会からの支援を背景に、デイトーナの黒人に対しては、その家庭から送り出された女子を教育する一方で、地域の人々に応じて、社会改良や社会教育を行うセツルメント活動や医療保健サービスの提供などの役割を果たしていく。また白人に対しては、バザー、音楽パフォーマンス、毎日曜午後のミーティングを通じて繰り返し人種の平等の必要性を説き、黒人への偏見を取り除く試みを行っていく。やがて、彼女の教育と地域改良の成功は、全国的に注目されるようになり、公民権運動や女性運動を通じて彼女は政治の世界に足を踏み入れることになった。

しかし、活動舞台の中心は移っても、彼女の目標が「次世代の教育と女性の自立によって黒人の地位を向上させていく」ことに変わりはなかった。ルーズベルト政権時代に全米青年局黒人関係課長（Director of Negro Affairs, the National Youth Administration）の役職にありながらも、彼女はベヂューン・クックマン大学学長であり続け、教育者としての責務を果たそうとしたのである。

2. 「ベヂューン学校」²⁰のカリキュラム

(1) デイトーナ文芸・産業学校（DLIS）のカリキュラム

設立当初（1904年）の生徒は、6歳から12歳までの女兒と5歳の息子を加えた6人で、「ベヂューン学校」は、幼稚園・小学校課程の学校として始まった²¹。授業料は毎週50セントと定められたが、ベヂューンは、授業料を支払えない家庭からは、食料（卵、鶏肉、野菜など）や労働（校舎の営繕等）を授業料の代わりにすることもあった²²。

当時の生徒の母親たちは、主として白人家庭の家事使用人として働いていたため、冬季以外には主人とともに北部で過ごすこともまれではなかった²³。そのため、DLISでは寄宿制度をもたざるを得ず、ベヂューンは、舎監や母親としての役割も担った。毎朝5時半のベルとともに生徒たちは起床し、聖書の学習から1日の授業を始めた。そ

の学習内容は、家政学や職業訓練が主で、このカリキュラムは、当時の黒人実学教育の最高峰であったブッカー・T・ワシントンのタスキギ学院の女子教育よりは、むしろ自らの出身校であるスコシア神学校の影響²⁴を受けたといわれている²⁵。

1915年当時のDLISのカリキュラムを見ると、小学校レベルでは、読み、言語（文法）、スペリング、算数、作文、図画、地理、自然観察、保健、聖書、道徳、マナー、歌唱、裁縫、家政の15科目が、学習内容に挙がっている。中学校レベル（現在の4年生から8年生のレベル）では、基本科目は小学校と同じであるが、歴史（ブッカー・T・ワシントンの*Up from Slavery*の学習を含む）や生理学のような科目が加わり、より高度な学習内容になっている。高等学校段階では、前半の2年間は、英語、科学、代数、幾何、黒人史、洋裁、園芸、音楽を学習し、後半の2年間は、主として職業訓練となっている。生徒たちは、卒業後の進路によって、洋裁、料理、家政、工芸、絨毯製作、家具製作、箒製作、たわし製作、農業（畜産を含む）、養鶏、家庭菜園などのなかから、自分の進路に必要な科目を学習することができた²⁶。

そのほか、1911年からキャンパス内にマクレオド病院が設置されたため、先行のコースに加えて看護婦養成が始まった。3年間²⁷の看護婦養成コースでは、実習科目として医学、産婦人科、外科、整形外科、小児科の看護実習が設けられており、講義科目としては、解剖学、医学、栄養学、看護学、英語が挙がっている²⁸。なお、マクレオド病院は、DLISの生徒が急性虫垂炎を患った折、人種差別の理由により、手術室ではなく、病院の裏の部屋で手術を受けさせられたという屈辱的な経験から、ベヂューンがキャンパス内に設置したものである²⁹。この病院は、1931年にハリファックス医療センターの新館（黒人病棟）に移管されるまで継続し³⁰、デイトーナにおける黒人の唯一の医療機関として、地域社会に大きな貢献をしていった³¹。

以上の昼間コースのほか、DLISには、当時の黒人教育には欠くことのできない夜間コースと、遠隔地教育も開設されていた。ベヂューンは、DLIS設立当初から、近隣の成人を対象として、識字教育のために夜間開講を検討していた³²。また、白人家庭で働くことができる年齢（14-15歳）の女子のためには、昼間に働いて自分の生活を支え、夜間に勉強ができるように夜間コースを

設置していた³³。

遠隔地教育のほうは、農民や日雇い労働者家庭のために始められたものである。DLIS では、地域の農民を対象とした農業技術指導講習会が、早くから行われており、近代農法の紹介や、生徒たちの作品の販売が実施されていた。この地域社会との関係の上に、1911年ごろからオフ・キャンパスの出前教育が始められた。またベヂューンは、学校の教員と生徒を引き連れて、松ヤニ採取に携わる日雇い労働者の居留地に行き、日曜学校や清潔、健康、食品衛生などについての講習会を行った³⁴。この居留地は、キャンパスからおよそ5マイル西にあり、トモカ川に面していたため、DLIS ではこの事業を「トモカ・ミッション」と呼び、学校の伝統的事業として引き継いでいった³⁵。

その他、ベヂューンは地域の青少年の健全育成にも深く係わるようになる。DLIS の生徒は、女子のみであったが、このほかに、黒人男児のためにYMCA を組織したり、黒人児童全体を対象とした夏期学校や、児童遊園を設置するなど、男児も含めた児童、生徒の生活の向上を常に考えて実行していった³⁶。

ただし、ベヂューンの夢は大きかったが、経済的には苦しい日々が続いた。学校では、薪の燃え残りを鉛筆代わりにしたり、熟しすぎた野いちごをつぶしてインク代わりにする³⁷などの創意工夫によって支出を最低限に押さえてはいたが、増え続ける生徒を前に、彼女は常に金策に追われていた。しかもこの生徒数増加は、授業料免除の生徒の増加によって、もたらされていたのである³⁸。その上、増え続ける生徒数に対応するため、DLIS は、ゴミ捨て場として使用されていた土地を得て、新しい校舎を建築し、1907年に現在のキャンパスの位置に移動したため、この建築、内装費用も含め³⁹、ベヂューンの財政的責任は、教育的責任を上回るようになっていた。なお、この時点での生徒数は、100名前後であったと言われている⁴⁰。

このような状況を解決に導いたのは、1909年に赴任し、教育面での責任者となったケイサー (Frances Reynolds Keyser) であった。ケイサーの就任によって、ベヂューンは対外的事業と、財政的責任の遂行に集中できるようになる⁴¹。ケイサーの就任はまた、実学中心で運営されてきたそれまでのDLIS のカリキュラムに、いくぶん学問的色彩を加えることとなった。ケイサーは、ニューヨークのハンター大学を卒業し、当時、白

バラ・ミッションの経営する女子教護施設の監督者として勤務していた。しかし彼女はそれ以前に、フロリダ州タラハッセーで聖公会が経営する学校での教育経験があり⁴²、またフランス語や文学評論家としても名前を馳せていた。それゆえ、ケイサーは、DLIS の教育内容を引き上げるためには、まさに適当な人物であったと言える。このケイサーの働きのために、DLIS は、黒人女子教育機関として衆知されるようになり、また、後に州政府の公認を得て、短期大学に昇格し、最終的には4年制大学に昇格するのである。

ケイサーを迎えたとはいえ、あくまでもDLIS 時代のカリキュラムは、当時のベヂューンの教育観を反映したものであり、また学校の創設期の物理的が必要であったことから、基本的に実業教育に大きなウェイトが置かれていた。この辺は、ブッカー・T・ワシントンが四半世紀前にタスキギ学院を創設した折、まず農機具製造や煉瓦製造を生徒に科したことと同様である。その南部黒人実学教育の大御所ブッカー・T・ワシントンを1912年、キャンパスに迎えた時、彼女は冒頭の挨拶で次のように述べている。「私は、自分の学校で、生徒たちに工芸と家政を教えていくつもりです。それによって、生徒たちに経済的自立を得させるつもりです。生徒たちは、考える頭と、働く手と、信仰にあふれた心が身に付くよう訓練を受けるでしょう」⁴³。

ベヂューンの描いた黒人女子教育の夢は、この実学教育を核にして、1920年ころまでには現実化し、入学希望者も益々増加していった⁴⁴。それとともに、学校の伝統として、黒人・白人双方からの支援、地域集会、生活支援サービスの提供が定着し、必修科目の唱歌で訓練された女子合唱団が、学校の広報活動と寄付集めに大いに活躍した。このようななか、彼女は次第に、DLIS を短期大学に昇格させることを検討し始める⁴⁵。

(2) ベヂューン・クックマン大学 (B-CC) のカリキュラム

学校の発展とともに、ベヂューンは、将来に向けての財政基盤の安定を考えるようになった⁴⁶。デイトーナの白人、黒人両方から支えられてきた学校ではあったが、短期大学への昇格をめざすには、さらに安定した財源が必要であり、また彼女自身、年齢的に考えて、南部から北部を股にかけた広大な地域を、寄付金集めのために何度も走り回ることに限界を感じ始めていたからである⁴⁷。

さまざまな選択肢を検討するなかで、彼女が最

終的に選んだのは、メソジスト教会の支援を受けることであった。このメソジスト教会本部からは、支援条件として1) ジャクソンヴィルにある男子校クックマン専門学校⁴⁸と合併すること、2) 女子教育から男女共学に変更することが提示された。これは女子教育に邁進してきた彼女にとって、大きな趣旨変更を要求されることを意味した。ベヂューンが結局これを受け入れる決断をした理由は、彼女がもともと社会の中の人種や性別などを超えた統合 (Unity) を推奨する考えを持っていたことと、メソジスト教会側が彼女に合併後の学校の校長として、これまで以上に指導力を発揮してほしいと要求してきたため⁴⁹と推測できる。クックマンとの合併は、1923年4月シンシナチ会議後の双方の調印をもって正式に開始され、1924-25年には、男子生徒がデイトーナのキャンパスに入学し始めた⁵⁰。

合併後の学校名は、当初、デイトーナ・クックマン高等専門学校 (the Daytona Cookman Collegiate Institute) であったが、1926年3月の評議員会の席上で、ベヂューンの貢献度を校名に反映すべく決議がなされ、現在の校名である Bethune-Cookman College へと改められた。ベヂューンは、1923年から1942年12月まで学長として、学校の指導にあたった。この間、1924年に、B-CCは、短期大学として公認を受け、昇格した⁵¹。

1924-25年の学校カタログ⁵²によれば、学校の教育指針は、次のように述べられている。「本校は、強く役に立つクリスチャン男性、女性の養成を目的としており、自立のための理性的思考力を培い、いかなる職業や活動をも全うできる能力を身につけるよう教育を行っている。我々は、市民性を最高度に高めることを追求しており、人間が教育を受けることにより、初めて自分の責任を真に理解できるようになると信じている。労働を尊ぶ精神から、本校では、1日1時間の労働を生徒に科しており、校内のどこでも清潔と勤勉を強調している。我校のモットーは、「人格形成の学校」であり、入学してくる男女生徒すべてにこのことを学んでもらうつもりである」⁵³。

この時点での学校組織は、以下の通りであり、コース別履修科目は、表1に掲載した。

- I 高等教育部——(a)短期大学部 (2年間)
(b)医学部予科 (2年間)
- II ビジネススクール——3年間
- III 師範学校——2年間 (高等学校卒業後)
- IV 中高等学校——(a)中学校 (7-9年生)
(b)高等学校 (10-12年生)
- V 教師実習学校 (附属学校) ——小学校
幼稚園
- VI 音楽学校——ピアノ、声楽、オーケストラ、
バンド

表1 デイトーナ・クックマン高等専門学校1924-25年コース別カリキュラムおよび学生数

コ ー ス	履 修 科 目	人数
高等教育部 (短期大学) (医学部予科)	英語、数学、ドイツ語、化学、生物学、歴史学、聖書、軍事学、体育、経済学、現代欧州史、社会学、アメリカ政府	3
ビジネス・スクール	速記法、タイプ、経理、商業英語、商業数学、商業地理、スペイン語、ドイツ語、フランス語、経済学、商法、社会学、マルチグラフ、マルチグラフ・タイプセッティング、ディック複写機、ロータリー複写機、ネオスタイル複写機、アンダーウッド複写機、アドレソグラフ、グラフォタイプ	2
師範学校	英語、教授法、心理学、学校保健、学校音楽、体育、工芸、図画、算数、教育史、米国史、初等教育、中等教育、高等教育、経済学、地理学、学級運営技法、教育実習、社会学および社会問題、フロリダ公立学校システム	2
中学校	英語、数学、地理、保健、歴史、聖書、技術 (男子)、家庭 (女子)、音楽、体育、生理学、職業訓練、図画、ラテン語または外国語 (フランス語またはスペイン語またはドイツ語)、科学	78
高等学校	英語、数学、聖書、ラテン語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、歴史、音楽、体育、化学、職業訓練、図画、物理	55
附属学校 (小学校、幼稚園) *実習校		148
音楽学校	声楽、楽器演奏	
家政科	家政学、洋裁、裁縫、工芸	6
実業科	家具製作、テーラー (洋服縫製)、箒製作 *看護婦養成 (マクレオド病院)	4

筆者作成 (資料: Catalogue of the Daytona-Cookman Collegiate Institute, 1924-1925.)

表 2 B-CC の在籍数の変化 (ベヂューンの学長時代)

	26-27年	28-29年	30-31年	32-33年	39-40年	40-41年	42-43年度
短大2年生	8	13	14	16	16	8	12
短大1年生	6	18	37	34	15	27	24
師範学校		7		10	543	494	230
実習校							144
看護科	7						
商業科	7	3	16		9	22	29
家政科	11	22	6		27	43	24
栄養科							17
音楽専攻			14	5			
美術専攻			1	2			
実業専攻			1				
農業専攻					18	23	
高校3年生	37	34	42	36	14		
高校2年生	36	36	32	12			
高校1年生	38	33	36	28			
中学3年生	49	35	34	16			
中学2年生	42	10	8				
中学1年生	34						
夜間学生		24					
その他			10	25			
合計	275	235	251	184	642	617	480

筆者作成 (資料: The Advocate: Bethune-Cookman College Catalogue vol.23-38.)

Ⅶ家政科——(家事, 家計管理), 洋裁,
裁縫, 料理, 服飾

Ⅷ実業学校——大工, 家具製作, 箒製作,
椅子製作, 洋服製作

なお学校カタログによれば, 看護婦養成は, 学校教育組織とは別にマクレオド病院の一部として掲載されていた。B-CC は, この後試行錯誤を重ねながら, コースとカリキュラムを発展させていく。各コースの変遷と入学者の変遷は表 2 に掲載した。

ただし合併は, また予期せぬ展開をもたらした。合併後の学長に就任したとはいえ, ベヂューンは次第に DLIS 時代に築いた学校経営の方針を少しずつ放棄せざるを得ない状況に追いこまいった。男女共学にしたことと, メソジスト教会からの意見が理事会を通じてもたらされるようになったこと, さらに合併時の資金計画が大恐慌などの予測できなかった事態の発生によって破綻したことなどにより, 彼女の予想以上に変更をせまられていったからである。具体的には, 男子向けの職業教育科目の増設と, 幼稚園・小学校部門の廃止, 中学校部門の廃止などが行われていった⁵⁴。このようななかベヂューンは, 社会の底辺にある黒人女性の地位向上に向けて建設された学校という, もともの設置目的が弱体化していくこと⁵⁵に焦燥感を募らせていった。

これに対して, ベヂューンが女子校への復帰を一部の理事に働きかけたという説もある⁵⁶が, B-CC のカタログを年次別に見るかぎり, すでに B-CC は, 男女共学の総合短期大学として新たな歩みを始めていたといえる。

このため, ベヂューンの活動は次第に B-CC から離れ, 女性地位向上のための他の分野にシフトしていく。彼女は, 1935年に全米黒人女性協会 (the National Council of Negro Women) を設立し, それまでに組織されていた黒人女性による様々な団体を NCNW の傘下に置くという, 黒人女性の一大組織化を行った。また1936年からは, 全米青年局の黒人関係課長の要職に就き, 黒人青少年の就職と進学の内容整備に務めた⁵⁷。彼女の活動の中心が政治, 行政職に移ったことに伴い, 活動拠点がワシントン D.C. となり, B-CC 学長職は, 実質的にパートタイム的になっていた。

3. ベヂューンにおける教育と社会運動の統合

前項でみたように, ベヂューンは, 黒人の地位向上のため, 女子教育に特別な使命を意識しており, その実現のためには, 教育と同時に黒人女性の組織化が必要であると考えていた。彼女の目から見ると, 黒人という人種が社会の底辺に押しやられているだけでなく, さらに黒人女性は, その

性差別の対象として抑圧されていた。この絶望的な状況から女性を含めた黒人全体の地位向上を獲得するためには、教育によって女子の自立、とくに経済的自立を獲得することが最も重要な事業であり⁵⁸、それに次いで、女性の組織化による政治的圧力の形成によって、それを支えていくことが肝要であると彼女は考えていた。また、彼女は、保育所の提供、公衆衛生活動など、学校や女性団体を通じて、働く黒人女性への支援と黒人家庭や地域社会のための社会改良事業をも同時に進めていった。

このような彼女の活動の軌跡をたどるとき、彼女の認識の根底に、まずブッカー・T・ワシントンと同じ、冷静な「現実主義」を認めることができる。彼女がタスキギと同じ「実業教育」を看板に掲げた理由は、第1に、南部の人種差別社会の中で「生き残る」ためには、急進的な社会変革をめざしている印象を与えることができなかったからであり、第2に、女子の自立のためには、当時の黒人女子に許されていた職業の選択肢に合わせた「実業教育」を行う必要があったからであり、第3に北部白人からの経済的援助を引き出すためには、彼らが黒人の自立にふさわしいと考えていた「実学教育」を行う必要があったからである⁵⁹。

しかし同時に、ベヂューンの活動は、ワシントンの保守的な妥協主義、漸進主義からの逸脱も見られる。すなわち彼女は、ワシントンが行わなかった人種の完全平等の主張を積極的に行い、機会があるたびに、黒人が白人と同じ能力を有していることを強調した。彼女は、黒人が肉体労働に向いているとか、黒人家庭が白人家庭より質的に劣るという当時の白人社会の見解には、全く耳を貸さず、デュボイスと同様、教育の質に人種間格差があってはならないと考えていた⁶⁰。その他、ベヂューンは、リンチ反対運動に公然と参加し⁶¹、全米有色人地位向上協会 (NAACP) にも参加と発言を行って、人種平等への政治的発言を積極的に行った⁶²。

したがって彼女の学校では、カリキュラムに、実学だけでなく、白人学校と同様のラテン語などの教養科目を加え、聖書教育やモデルハウスでのマナー教育などを通して、最高のマナーを身につけさせる訓練を行った。また、黒人史や社会学を独自科目として追加し、黒人の人種としての誇りを喚起し、黒人学生の自尊心を育てていった。彼女は、この黒人の人間としての尊厳を、自らの身をもって生徒や地域社会に示しさえした。例えば

彼女は、DLISの草創期から、白人家庭を訪問するときに、決して裏口から出入りしなかったし⁶³、日曜午後のコミュニティ・ミーティングでは、白人と黒人の座席を区別しなかった。

ベヂューンの教育観は、またこの時代、特に第2次世界大戦前の時代の黒人女性教育をめぐる社会的環境の影響も受けていた。この時期は、19世紀的女性観が払拭されていない時期であり、彼女は、職業技術教育やビジネス・スクールの開設によって、女性の経済的自立を生徒に教育しつつ、同時に家庭を神聖化した世界観（すなわち女性の役割として最もふさわしいのは、家庭を整え、子供を育てることであるという考え）をも刷り込んでいった。先にみたように、これは、スコシア神学校とルーシー・レイニーの影響による。しかし、これはまた同時代の他の黒人女性教育家たち、例えばシャーロット・ホーキンス・ブラウン (Palmer Memorial Institute 創設者)、ナニー・ヘレン・ボローグズ (the National Training School for Women and Girls 創設者) にも共通してみられる特徴であることから、当時の黒人女性教育家の共通する教育方針であったように思える。

コールマン・バーンズによれば、黒人文化において女性の教育を重視する理由は3つあるとされる⁶⁴。第1は、伝統的、歴史的に黒人児童の地位は、その母親によって決定されること、第2は、黒人女性は、黒人男性と比較して、より数量的に多く、かつ地位的に高い職の機会があったこと、第3は、黒人女性は、黒人文化の第一義的教師の役割を果たしていると信じられてきたことである。これらのことから、20世紀初頭的女性教育家たちは、黒人女子を教育することこそが、黒人社会全体の文化・教養の向上や、経済力の向上をもたらし、ひいては黒人社会に対するスティグマを解消し、白人と平等の地位を獲得することができる最良の方法であると考えていたように思われる。

ベヂューンにとって、黒人女子教育は、あくまでも黒人女性の教養と職業能力の向上を通じて、黒人社会全体の地位向上をもたらすための装置であり、その大目的を果たすためには、彼女は教育だけにこだわらず、あらゆる機会を使う覚悟と意思を持っていた。したがって、彼女の活動は、常に複数路線をとっており、1930年代から本格化する政治的活動や、行政職での活動も、彼女の路線変更と考えるべきではなく、同一目的の複数路線の強調点が、その時々々の必要性に応じてシフトしてきたものと解釈すべきである。いずれにして

も、教育を核にしなが、生来の政治的手腕を發揮して、アメリカ社会の底辺にあった黒人の、しかも女性の地位向上を確実にした彼女の功績は、黒人史のみならず、アメリカ現代史の重要な1ページとして記録されねばならないであろう。

注

- 1 “My Last Will and Testament” (Originally published in *Ebony*, August 1955) より抜粋 (筆者訳)。
- 2 *Daytona Beach Morning Journal*. May 19, 1955.
- 3 “First Annual Conference of the Women’s Army for National Defense, Chicago, Ill., September 11th, 12th, 13th, 1944.” p.263. ジョセフ・テラーによる序論, p.21. (Flemming, Sheila Y. *Bethune-Cookman College, 1904-1994: the answered prayer to a dream*. Virginia Beach, VA: The Donning Company/Publishers, 1995.) より引用。
- 4 Hine, Darlene Clark, “Lifting the Veil, Shattering the Silence: Black Women’s History in Slavery and Freedom.” In Darlene Clark Hine eds., *The State of Afro-American History: Past, Present, and Future*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1986. p.239.
- 5 以下の段落も含め, Holt, Rackam. *Mary McLeod Bethune: A biography*. Garden City, NY: Doubleday & Company, Inc., 1964. pp.1-22. 参照。
- 6 Biographical Sketch (複数) (*Mary McLeod Papers: The Bethune Foundation Collection*.) には, 1893年という記述が見られる。
- 7 Fleming, *Bethune-Cookman College*. pp.10-12.
- 8 Bethune-Cookman College にて行った Dr. Fleming に対するインタビュー (2001年8月23日) より。
- 9 ワシントンについては, 西崎緑「差別社会における自立支援 —Booker T. Washington 再評価—」福岡教育大学紀要第50号第2分冊64-92頁参照。
- 10 レイニーに関する記述は, 以下も含めて McCluskey, Audrey Thomas. ““Most Sacrificing” Service The Educational Leadership of Lucy Craft Laney and Mary McLeod Bethune.” pp.193-195. In Christie Anne Farnham eds. *Women of the American South: A Multi Cultural Reader*. New York: New York University Press, 1997. 参照。
- 11 1899年にハンプトン学院でレイニーが行った講演 (Laney, “The Burden of the Educated Colored Woman,” Hampton Negro Conference, paper no.3 (1899), Hampton Institute, 41). McCluskey, ““Most Sacrificing” Service.” p.194.
- 12 ベヂューン自らの言葉を借りれば, 「Very early in my life, I saw the vision of what our women might contribute the growth and development of the race—if they were given a certain type of intellectual training.」 Mary McLeod Bethune, “A Philosophy of Education for Negro Girls.” (1926) *Mary McLeod Bethune Papers*, Amistad Research Center, Tulane University. Box2 Folder13. (McCluskey, A.T. and Smith, Elaine M. eds., *Mary McLeod Bethune: Building a better World: essays and selected documents*. Bloomington, IN: Indiana University Press, 1999. pp.84-86より引用)
- 13 ベヂューンの教えにその熱意が読みとれる。Bethune, “A Philosophy of Education for Negro Girls.” pp.84-86.
- 14 Fleming, *B-CC*. p.12.
- 15 McCluskey, ““Most Sacrificing” Service.” p.196.
- 16 Lena, Lucille, Ruth Warren, Anna Geiger and Celest Jackson がそのメンバーとなった。Flemming, *B-CC*. p.23.
- 17 Holt, *Mary McLeod Bethune*. p.54-57. Fleming, *B-CC*. p.23.
- 18 Lempel, Leonard, “African American Settlements in the Daytona Beach Area 1866-1910.” in Annual Proceedings of the Florida Conference of Historians. March 11-13, 1993 at Orange Park, FL. (This article was provided to me by Dr. Leonard Lempel on August 24, 2001.)

- 19 Hot, *Mary McLeod Bethune*, pp.54-91. Flemming, *B-CC*, pp.23-25.
- 20 地域の人たちからは、「学校」または「ベヂューン学校」と呼ばれた。
- 21 フレミング教授によれば、1920年代になっても、実際のところまだ中学校課程までの教育が中心であったという。(Interview to Dr. Flemming)
- 22 McCluskey, Audrey Thomas, "Ringin' Up a School: Mary McLeod Bethune's Impact on Daytona," *Florida Historical Quarterly* 73 (3) : 206, 1997.
- 23 Holt, *MMB*, p.60.
- 24 スコシアの産業部カリキュラムは、縫製、料理、家庭清掃管理実習(寮の清掃管理を兼ねて)であった。(Facts On File: *Encyclopedia of Black Women in America: Education*. NY: Facts On File Inc. 1997, p.132.)
- 25 McCluskey, Audrey Thomas, "'We Specialize in the Wholly Impossible': Black Women School Founders and Their Mission." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 22 (2) : 410, 1997.
- 26 「家政」科目は、消費、食品衛生、家庭看護、家計管理をその内容としていた。1915年当時のカリキュラムは、Flemming, *B-CC*, p.28. を参照したが、もともとの資料は、*Daytona Educational and Industrial Training School For Negro Girls and Its Extension Work: Eleventh Annual Catalogue, 1915-16*.
- 27 Flemming の記述では3年間、McClusky の記述では13ヶ月。
- 28 Flemming, *B-CC*, p.28.
- 29 Holt, *MMB*, pp.143-145.
- 30 *Halifax Medical Center After 60 years of service: the pioneer spirit lives on*. By Halifax Medical Center. p.5. (Halifax Historical Society, vertical file) Halifax Historical Museum 所蔵。
- 31 Flemming, *B-CC*, pp.161-163.
- 32 ランプの提供さえあれば、いつでも夜間開講すると申し出たベヂューンに何人かは応じた。Holt, *MMB*, p.61.
- 33 Holt, *MMB*, p.74.
- 34 McClusky, "Ringin' Up a School," p.211.
- 35 Flemming, *MMB*, p.30.
- 36 McClusky, "Ringin' Up a School," p.211.
- 37 McClusky, "Ringin' Up a School," p.206.
- 38 1906年以後の記録によれば、授業料免除を導入したために生徒数は3倍になったことがわかる。(McClusky, "Ringin' Up a School," p.206.)
- 39 1910年には、通りの反対側の農場を買取り、1911年には病院を開設、1918年には、四年生の高等学校を設立するなど、ベヂューンは学校を急速に発展させていったため、常に資金が不足していた。
- 40 Holt, *MMB*, pp.83-84.
- 41 MMB, "A Tribute to My Friend and Co-Worker, Frances Reynolds Keyser." *The Advocate* 28. (September 1932), pp.3-4. P.K. Young Library of Florida History, University of Florida, Tallahassee.
- 42 Holt, *MMB*, pp.102-103. McClusky, "Ringin' Up a School," p.208.
- 43 McClusky, "Ringin' Up a School," p.208.
- 44 Flemming, *B-CC*, p.31.
- 45 Flemming, *B-CC*, pp.31-32.
- 46 Flemming, *B-CC*, p.32.
- 47 Newsome, Clarence G., "Mary McLeod Bethune and the Methodist Episcopal Church North: In But Out." *Journal of Religious Thought* 49 (1) : 11, 1992.
- 48 フロリダ州における最初の黒人高等教育機関として、1872年にメソジスト教会によって、牧師養成と教師養成を目的として建設された学校である。この学校は、1871年死去したニュージャージー州のメソジスト教会牧師であり奴隷制廃止論者であったアルフレッド・クックマンの遺族からの基金200ドルをもとに建設された。そのため彼にちなんでクックマン専門学校と名づけられた。(Flemming, *B-CC*, pp.35-45)
- 49 Newsome, "MMB and the MEC North," p.15.

- 50 Flemming, B-CC, p.44.
- 51 Flemming, B-CC, pp.45-47.
- 52 *Catalogue of the Daytona-Cookman Collegiate Institute, 1924-1925*. B-CC 図書館所蔵 (図書館長の好意によって提供されたコピーを西崎所蔵)。
- 53 *Catalogue*, pp.12-13. 筆者訳。以下の内容も *Catalogue* より抜粋。
- 54 Flemming, B-CC, pp.47-48.
- 55 Newsome, "MMB and the MEC North," p.16.
- 56 Newsome, "MMB and the MEC North," p.16.
- 57 彼女のリーダーシップの下、全米で15万人の黒人青年男女が高等学校に進学し、また6万人が大学に進学した。(Berry, Mary Frances, "Twenty Century Black Women in Education." *Journal of Negro Education* 51(3) :291, 1982.
- 58 Barnett, Elizabeth F., "Mary McLeod Bethune: Feminist, Educator, and Activist," in James A. Banks eds. *Multicultural education, transformative knowledge, and action: historical and contemporary perspectives*. NY: Teachers College Press, 1996. p.224.
- 59 Barnett, "MMB," pp.225-226.
- 60 Perkins, C.O. "The Pragmatic Idealism of Mary McLeod Bethune," *Sage* 5(2) :30-47, 1988.
- 61 Smith, *MMB*, p.8.
- 62 ベヂューンの講演記録や著作は、*Opportunity, Crisis, Ebony* などに掲載されている。また彼女は、*Chicago Defender* や *Pittsburgh Courier* などの黒人新聞にもコラムを発表している。(Smith, *MMB*, p.7.)
- 63 Holt, *MMB*, p.65.
- 64 Coleman-Burns, P. "African American women; Education for what?" *Sex Roles: A Journal of Research* 21(1/2) : 145-160. (Barnet, "MMB," p.224より再掲)